

座談会 「国際舞台で活躍する方々に聞く」

2011年10月24日、財務会計基準機構（FASB）の会議室において、現在、国際会計基準審議会（IASB）等の国際的な機関において日本の代表としてご活躍されている方々にお集まりいただき、座談会を開催いたしました。

皆様には、①現在までに、国際財務報告基準（IFRS）に関連してどのような活動をされているのか、②国際的な議論に参加される中で特にご苦労されたこと、あるいは国際舞台で要求される能力とはどういったものか、③今後、日本の意見を国際的な基準開発によりよく反映するために必要な戦略、国内市場関係者の対応のあり方等について、お話を伺いました。



（敬称略）

IASB 理事

おうち たかつぐ
鴛地 隆継

IFRS 解釈指針委員会委員／
富士通(株)財務経理本部
IFRS 推進室長

ゆあさ かつお
湯浅 一生

IFRS 諮問会議委員／
公益社団法人 日本証券アナリスト協会
参与 教育第二企画部長

かねこ せいいち
金子 誠一

世界作成者フォーラム委員／
パナソニック(株)理事
東京支社経理グループ
グループマネージャー

やまだ ひろし
山田 浩史

世界作成者フォーラム委員／
三井物産(株)経理部
会計基準室室長代理

いしくろ てつじろう
石黒 徹次郎

ASBJ 副委員長

かとう あつし
加藤 厚

〔司会〕 ASBJ 委員長

にしかわ いくお
西川 郁生

座談会

「国際舞台で活躍する方々に聞く」

西川 企業会計基準委員会（ASBJ）の委員長の西川でございます。本日は、皆様、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の司会進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、この座談会にご出席いただく皆様をご紹介したいと思います。最初に、鶯地隆継さんです。鶯地さんは、2011年7月から国際会計基準審議会（IASB）の理事にご就任されております。理事就任の直前は、IFRS 解釈指針委員会（IFRS IC）の委員をされておりました。

続いて湯浅一生さんです。湯浅さんは、富士通株式会社財務経理本部 IFRS 推進室長で、IASB の理事にご就任された鶯地さんの後任として、同じく 2011 年 7 月より IFRS IC の委員にご就任されております。その前には、世界作成者フォーラム（GPF）にご参加されておりました。

次に、金子誠一さんです。金子さんは、日本証券アナリスト協会参与で、IFRS 諮問会議（IFRS AC）のメンバーであるとともに、資本市場諮問委員会（CMAC）（旧アナリスト代表グループ（ARG））にもご参加されております。

次に、山田浩史さんです。山田さんは、パナソニック株式会社理事、東京支社経理グループグループマネージャーで、IASB 及び米国財務

会計基準審議会（FASB）における財務諸表表示プロジェクトのジョイント・インターナショナル・グループ（JIG）というワーキンググループのメンバーであり、また、2011年9月より GPF のメンバーに選出されております。

続いて石黒徹次郎さんです。石黒さんは、三井物産株式会社経理部会計基準室室長代理で、GPF のメンバーとして、国際財務報告基準（IFRS）に関わっておられます。

また、ASBJ の国際担当で副委員長の加藤厚さんも参加しております。加藤さんは、古くは大蔵省が証券監督者国際機構（IOSCO）に出ていた時代のアドバイザーや、IASB の前身である国際会計基準委員会（IASC）の金融商品起草委員会のメンバーでもありました。

さて、企業会計審議会などで、IFRS についての適用の議論が進められている中でも、日本の意見を発信していく、日本の主張を IASB に聞き入れてもらうということの重要性が、昨今言われております。1つの国の主張が何でもかんでも通るといことはあり得ませんし、一度決まった基準の内容を変えていくことの大変さというのは、IASB と身近に接する私たちもそれなりに理解しているつもりです。しかし、難しいと言っているばかりではないわけで、本日は、IFRS に関する活動に直接的に参加されている方々をお招きいたしまして、国際的な機関

におけるご苦労話をお伺いしながら、今後、日本として、どうのことを考えてIASBの議論に立ち向かっていくべきなのかといったことまで議論させていただければと思っております。

IFRSに関する活動内容

西川 それでは最初に、現在、あるいはこれまでに、皆様がIFRSに関係してどのような活動をされてきたか、あるいはされているかについて、お1人ずつ伺っていきたいと思います。

鶯地さんからご紹介順にお願いします。

鶯地 ご紹介いただきましたとおり、私は2011年7月からIASBの理事に就任しております。IASBの理事の仕事について、就任するまでにある程度イメージを抱いていたつもりでしたが、就任してから、「ああ、こんなに大変だったのだな」と思っています。

IASBはIFRSを策定しているところですから、主たる業務というのは会計基準の策定ということになります。8月を除いて、毎月必ず理事会が開かれます。大体、1回の理事会で最低3日、長ければ4、5日会議が行われます。まだ3回しか参加していないのですが、審議している量は非常に多くて、例えば9月でしたら30項目のペーパーがありました。それぞれ質問が3問から5問程度ありますので、審議に関して1つ1つ判断を下す項目が、1回の会議で100項目を超えます。当然、その100項目を超えることを決めるにあたり、それ以前の決定や、そこに至るまでの経緯などをすべて把握しないとイケません。何より大事なのは、IASBだけで基準を決めるものではなくて、当然、その後ろには、いろいろな関係者がいるわけで、その関係者たちの意見をしっかりと反映した上で基準を決めていかないとイケません。この辺りが実は一番大変なのか



IASB 理事 鶯地 隆継氏

など思っています。

当然、会計基準というのは、いろいろな関係者が合意して初めて基準として意味があるものだと思いますので、一方的に一部の利害関係者の意見だけが通るような基準であってはなりません。ですから、満遍に、公平に、いろいろな方の意見をしっかりと反映させることが一番大事です。

特に難しいのは、作成者側の負担ということと、利用者側のより多くの情報がほしいということとのバランスで、ここが一番難しく、当然、コストがどうかという話になります。それは、単に作成者のコストだけではなくて、会計基準として制定されたときに、それが社会全体に与えるコストがどのぐらいなのかといった観点から判断しなければいけないと思っています。

私はあくまで日本の枠で理事になっている関係もあって、当然、その会議に臨むにあたっては、日本の関係者の声をできるだけ聞こうと思っています。ただ、当然のことながら、私1人で直接全部聞けるわけではないので、これはASBJのスタッフの方々にご協力いただいて、それぞれの基準について、それぞれの利害関係者がどういうご発言をされているのか、どうい

うご意向があるのかというようなことを伺って、会議に臨むようにしています。

会議は1か月に、日数にして4、5日ですが、それ以外に、実はたくさんの活動があることを改めて知りました。例えば、IASBは実にいろいろな団体とミーティングを持っています。それは各国の会計基準設定主体であったり、業界団体であったり、アナリストであったり、監査人であったりするわけですが、そういったミーティングに各理事が手分けして参加しております。

それから、しっかりと基準を設定するにあたって何よりも大事なのが、関係者の意見を事前に聞くアウトリーチという作業です。事前に、誰がどのように参加するかなど、アウトリーチ計画を作っております。まだ理事になって3か月余りしか経っていないので、それほど多くは参加していないのですが、私も今後参加していくことになります。

それから、セミナー等、教育活動も行っておりまして、11月にはオーストラリアのメルボルンでIFRSカンファレンスを開催します¹。私もリースの担当を割り当てられていまして、その準備も始めないといけないという状況です。

さらに、それ以外に会計基準を最終的に決めるにあたって、バロットという手続きがございます。バロットというのは、最終的な基準案を各理事に配って、理事が精読をして、「てにをは」も含めてのコメントを出します。それが何回も繰り返されますので、書類はかなりの頻度で回ってきます。目を通して、コメントを付けて返す作業です。最終的に、その基準に問題がないと判断すればサインをするという手順もございます。そういった形で基準作りに直接的に参加していくというのが、IASBの理事の仕事でござ

います。

湯 浅 私がIFRSにかかわる仕事をさせていただいたのは、GPFという作成者の会合が最初です。鶯地さんのお話にてIASBとして関係者の意見を聞くということがありましたが、GPFは、その中で企業、つまり財務諸表作成者の立場の意見を聞くという会合になります。このような取組みが始まったのは2007年からだと聞いていますが、私が参加したのは3回目が開催された2008年の夏からです。

当初は、全体の状況もわからずに、無我夢中で参加したというのが正直なところでした。

振り返ってみますと、収益認識やリース、負債、財務諸表の表示などといったIASBとして重要なテーマは、ほとんど毎回のようにはアジェンダとして取り上げられて議論しました。3年ほど意見交換の場に参加して感じたのは、IASBの人たちが、参加者の意見を一生懸命聞いて、よりよい基準を開発しようとしていたということです。



IFRS 解釈指針委員会委員／
富士通株式会社 財務経理本部 IFRS 推進室長
湯浅 一生氏

1 IFRSカンファレンスは、2011年11月25日にメルボルン（オーストラリア）で開催された。

2011年7月から、鷺地さんの後を受けまして、IFRS ICに、一般に旧称のIFRICと言われているものですが、そこに参加することになりました。まだ2回参加しただけですが、GPFと全然違うというのが正直なところです。GPFの場合は、アジェンダもわりと限られていて、年に3回、それぞれ1日だけの会議だったのですが、IFRS ICの場合は2か月に1回、2日間ずつの会合が年に6回あります。アジェンダの項目も、審議会ほどではないのですが、1回十数個あって、トピックは解釈ということなので、非常に細かい議論になります。

IFRS ICがGPFと決定的に違うところは、実際に解釈指針や基準の改訂を作っていく立場にあるということで、委員それぞれが、スタッフの提案に合意するかどうか、反対だとすればどうするのかといった判断を求められることだと思います。責任の重さを強く感じているのですが、今はアジェンダを理解することだけで精一杯ですが、これから貢献していかなければならないと考えています。

金子 私は3年前から、IASBに対してアジェンダなどをアドバイスする会議であるIFRS ACのメンバーになりました。就任した当時は基準諮問会議（SAC）と言われていましたが、この会議は年3回、ロンドンで行われず。

この少し前、2004年の初めから、IASBと世界のアナリストの会議であるCMACに出席しています。当初はARG（Analysts Representative Group）と呼ばれていた会議ですが、年に3回、IFRS AC会議の前後にロンドンで開催されています。ARGが発足して数年後、作成者の方々から、「作成者にも同じような会合を」という声上がり、その結果、先ほど湯浅さんがおっしゃったGPFが発足したという経緯があります。

丸7年ほどロンドン通いをしてきましたが、



IFRS 諮問会議委員／
公益社団法人 日本証券アナリスト協会
参与 教育第二企画部長 金子 誠一氏

この間に随分と、IASB自身が変わったなという感じがします。2004年の初めといいますと、2001年にIASBが設立されて、稼働し始めたところで、ヨーロッパがIFRSを採用するかどうかの直前といったころでした。当時のIASBには、まだ設立当初の理事さんたちが多かったという事情もあったのかもしれませんが、理想主義に燃えているような、かなり過激な会計基準を作ろうとしていた時代で、それだけに、またいろいろな意味で意見の対立も激しかった時代だったと思います。

それから何年か経って、IFRSが実際にヨーロッパで採用され、またアメリカや日本とのコンバージェンスも進んできて、IASBも折衷主義的な現実路線に転じたなという印象を受けています。

ただ、その間、一貫して感じてきたのは、実際にIASBで働いている理事やスタッフが、非常に一途に、よい会計基準を作ろうという理想に燃えて一生懸命やっているなということ、これだけはひしひしと感じましたね。

我が国には、いまだにIASBは悪の巣窟であるという見方もあって（笑）、かわいそうだな

といつも思っています。

山田 私は2011年9月に湯浅さんの後任としてGPFのメンバーに選出され、11月の会議から出席することになりました。

以前からの私のIFRSに関する活動内容でございますが、財務諸表表示プロジェクトのJIGというワーキンググループのメンバーとして、2005年から、JIG会議に参加しております。日本からは法政大学の八重倉教授と私の2人がメンバーになっております。

会議は、ロンドン、ニューヨーク、ノーウォークで、今まで7回開催されておりますが、このプロジェクトはMoU（中長期プロジェクト）の中で優先順位が高くないということから、現在、検討を中断しております。このプロジェクトが復活するかどうかは、IASBが現在、意見募集をしているアジェンダ・コンサルテーション2011の中で議論される見込みです。

これは当初は「業績報告」という名前のプロジェクトでしたが、この会議に参加しまして、当初の案を見ますと、包括利益計算書において純利益の表示がなくなって、最終行に包括利益が開示されるという、かなり過激な案が提示されておりました。作成者から、純利益は業績評価の最重要指標であり、開示することが必要だということを何度も主張して、結果的には純利益の開示は残ることになりました。その後、プロジェクトの名前が「財務諸表表示」に変更され、対象範囲が包括利益計算書だけでなく、財政状態計算書やキャッシュ・フロー計算書に拡大して、さらに直接法キャッシュ・フロー計算書や資産・負債の調整表を要求したり、詳細なセグメント報告を求めるところにまで議論が拡大してきました。

論点整理では、かなり膨大な開示が要求されるという案になったため、作成者中心に開示が過大であるという問題点を粘り強く指摘した結果、一部の開示は削減されましたが、まだ作成

者が納得できる開示レベルには至っていない状況です。IASBで公開草案を出すかどうかという段階になって、理事の承認が得られず、公開草案に代えてスタッフ・ドラフトという形で財務諸表表示の改訂案を出すことになりました。その後、プロジェクトの優先順位のこともあって、現在はこのプロジェクトはいったん中断しているという状態です。

IASBの基準設定の過程で、さまざまな会計基準案の論点整理や公開草案に対するコメントの作成、あるいはラウンド・テーブル、アウトリーチなどにも積極的に関わってきた経験が、財務諸表表示のJIGなどの国際会議でも活かたのではないかと思います。今回はGPFのメンバーに選出されまして、カバーすべきテーマは非常に広がるのですが、作成者の立場で、関係者の意見もよく聞きながら、IFRSが質の高い会計基準になることに貢献できるように、発言していきたいと思っています。

今回、メンバーになりましたGPFは財務諸表作成者としての意見が求められますので、検討中のIFRSについて、経営者の納得性の視点、実務的な適用可能性や開示レベルの適正性の観点に留意し、有益なインプットを行ってきたいと考えております。

石黒 私は、先ほどからお話に出てきておりますGPFに、2009年の末ごろから参加しております。GPFは、IASBが基準を作成していく上で、作成者の意見を取り入れようというか、より作成者の意見を聞ける機会を作ろうということで発足したと聞いており、参加しているメンバーは私も含めて世界各国から、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、その他の地域からバランスよく出席しております。なるべくIASBの理事の方々に効果的にインプットして、基準の作成に貢献していければという思いで参加しております。

GPFというのは、IASBにしてみれば、情報

収集の場の1つという位置づけなのかもしれませんが、コメントレターの提出などとすごく違うのは、直接的にフェース・ツー・フェースで意見の交換ができるということです。その場で意見を言って、それに対するフィードバックというか、「私たちはこう考えています」という説明を受けられる非常によい機会なので、とてもいい場に参加させていただいていると思っています。また、他国からの参加者の意見も聞けるととてもいい場であり、日本特有な意見かと思っていたものが、各国の作成者も同じ意見であったというものも多くありました。

国際的な舞台での苦労やそこで求められる能力

西川 続きまして、これまで国際的な議論に参加されてきた中で特にご苦労されたことや、国際舞台で要求される個人の能力についてお話を伺いたいと思いますが、その前に、加藤さんがこれまでも国際的な会計基準の議論に直接的、間接的に長くかかわってきたことでもありますので、まずは加藤さんのお話からお聞きしたいと思います。

加藤 私もいろいろな国際活動に参加してきた中で、自分の英語能力や会計の専門的知識が国際レベルにあるのかという面では苦労も多かったわけですが、そのような点は皆様もそれぞれのお立場でご苦労されていると思います。

ただ、そのようなテクニカルな面以上に、日本の立ち位置や姿勢が国際的にどのように見られているかということについて、大きなギャップを感じる事がかなりありました。

約20年前から始まった、ある国際会議に日本代表のテクニカル・アドバイザーとして10年近く出席しましたが、日本代表の主張が、いつもアメリカに近かったということで、「な

ぜ日本は、アメリカの主張にばかり従うのか？日本独自の主張はないのか？」ということ、ヨーロッパの代表の人たちからよく言われました。当時、日本の主体性について外国の人たちからいろいろと非難がましいことを言われたのが、私の苦労話の1つとしてあります。

また、当時感じたのと似たようなことを、現在でも別の形で感じています。先日、世界会計基準設定主体（WSS）会議と各国基準設定主体（NSS）会議という国際会議に出席した際に、日本とアメリカが引き合いに出され、2つの経済大国がIFRS適用に関してまだ意思決定をしていないことについてのさまざまな言及がありました。そこで、“今でも、国際社会における日本とアメリカが、他の国とは違う見方をされているんだな～”ということ、身をもって感じました。皆様も、それぞれのお立場で国際会議に参加されておられて、同じようなことを、書類の中における記述だけでなく、会議中の議論や雰囲気の中で肌を感じるようなことはないでしょうか？もし、感じておられるのであれば、その辺りのことも含めてお話をお伺いできれば、今後の意見発信をどのようにしていったらよいのかという今日のこれからのディスカッションに結びつけていけるのではないかと思います。

西川 ありがとうございます。それでは鷺地さんから先程と同じ順でお願いします。

鷺地 国際会議に限らず、すべての会議について当てはまると思いますが、特に国際会議でつくづく感じるのは、議論の前提となっている背景をしっかりと掴むことが、とても重要でありながら、かつ難しいということです。

当然、その議論をするにあたって、そこに至るまでの経緯があり、どういう議論があって、具体的にどういう事実があるから、ここで今議論しなければいけないのかということが必ずあ

るわけです。ところが難しいのは、会議のペーパーが配られてから、そのペーパーを読むだけでは、到底そこまでは把握できないということです。

これは、IASBの理事になる前のIFRS ICのときにも痛切に感じたわけですが、ペーパーになって、アジェンダ・ペーパーやサブミッションとして出てきて、IFRS ICで議論されるに至るまでは、当然、それぞれの監査の現場や、それぞれの企業の決算の現場で相当な議論が積み重なって、あるいは場合によっては何年もかかって、初めてアジェンダとして出てくる。それを1週間前後で読んで背景を理解するのが不可能なのは当たり前なわけです。完全に理解できないからといって、議論に参加しないわけにもいきません。ただ、会議の場だけで頑張ろうと思っても、とても太刀打ちできません。結局、会議でちゃんと発言しようと思えば、その背景をしっかりと掴めるまで、会議以外の場でどのような活動ができるかということに懸かってくると思います。幅広くアンテナを張って、いろいろな人の意見を聞くことがとても大事だと思います。

その意味で、私もできるだけロンドンにいる時間を長くして、実際にペーパーを書いているスタッフと接点を持つことを心がけています。彼らに聞くと、ペーパーとなった経緯を説明してもらえますので、そういうことはとても大事だと思っています。

先日、日本のある業界団体の方々が来られて、IASBのスタッフとミーティングを行う機会があったのですが、スタッフは非常に聞く耳を持っているというか、むしろ、本当にウェルカムという感じで一生懸命ヒアリングをしていました。私もIASBの理事になって初めてわかったのですが、IASBの立場からすれば、やはりしっかりと情報を集めた上で判断をしなければいけないので、情報が欲しいわけです。ですから、日

本の業界の方々が、いろいろな準備をされ、ロンドンまで遠路遙々来られて行うプレゼンテーションは非常に貴重な情報です。スタッフは、日本の状況をペーパーに織り込んで、ペーパーの質を高めることができるので、ウェルカムなわけです。そういう関係やプロセスを経て会計基準が作られていくということ、この3か月で知ることができましたが、自分自身もまさにこれをやっていかないといけないと思っています。

湯浅 鶯地さんがおっしゃったとおりですが、各国の現場で議論が繰り返されて、考え抜かれたいろいろな案件がIFRS ICに持ち込まれるということで、まさに今、その対応の難しさを思い知っているところです。他のメンバーには4大監査法人のテクニカルなトップの方や基準設定に関わった方などもいて、大変レベルの高い議論をしている中で、力量不足を痛感しています。事前に勉強して議論の背景をよく理解した上で、自分の考えが頭の中で活性化しないと、発言すらできないということ、身をもって経験している状況です。

事前の勉強ということでは、普段からスタッフと議論したり、関係者から意見を聞いたりすることが理想ではあるのですが、会社の業務もあるので、なかなかできないしております。アジェンダ・ペーパーが2週間ほど前になると送られてくるのですが、その段階からASBJの方々に教えていただくなどして、理解を深めているというのが実際のところですよ。

あと、鶯地さんからアドバイスをいただいたことですが、IFRS ICの前日にロンドンに行って、IASBのスタッフと議論するようにしております。これは頭を英語に切り替えるという意味でも、かなり役に立っています。

英語という言葉の壁は痛切に感じています。専門的な議論をしている中で発言するのは特に難しく、チャレンジであると思っています。

GPF のときは、放っておくと何も発言できないので、手を挙げて議論に割り込まなくては いけなかったのですが、IFRS IC ではボタンを押すと順番に回ってくるようになってい ますが、ボタンを押してから3人ぐらい発言し ている間に話の内容が変わってしまう、あるい は発言しようと思っていたことを他の人に言わ れてしまった、ということもあります。いずれ にしても、割り込むのも大変ですし、順番が回っ てきたところで、前の人たちの発言も踏まえなが ら、聞いてもらえる意見を英語で伝えるとい うことで、苦労しているところです。

この「聞いてもらえる」というのが非常に 重要だと思っています。自分の都合だけ、あるい は日本だけの利害から出た意見を言っ ばなしにするのでは駄目で、IASB という基準 設定主体に対して、基準開発の過程で見逃し ている点や、作成者の立場として対応に困る といったところをしっかりと伝えることがで きて初めて共感してもらえます。単なる批判 ではなくて、こうすればよりよい基準になる といった、建設的な意見をいかに言うかが重 要だと思っています。

加藤さんがおっしゃった、日本としてどう見 られているかという感覚ですが、GPF も IFRS IC も、ウェブキャストで全世界の人に見られ ていることは肌で感じます。どちらも日本代表 ではあるのですが、むしろ、アジアの枠から選 ばれているということがありますので、このこ とは、発言する時にカメラが切り替わって自分 の映像を見ると強烈に意識します。「アジアを 代表して何を言ってくれるのか」と見られてい るなという感覚です。

金子 私の場合、特に IFRS AC では日本 証券アナリスト協会の代表として参加している という形をとっていますので、私個人の意見と いうよりも、日本のアナリスト、財務諸表利用 者が全体として、何をどのように考えているの

かを理解するということが一番大事で、そこが 苦労するところです。

協会会員全体の意見というのは、数年に一度 程度、根本的なアンケートをとったり、あるい は時に応じて、重要案件があればその都度アン ケートをとったり、個別の基準ですと、ASBJ のスタッフの方に勉強会に来てもらって、その 出席者にアンケート調査で意見を聞くなどして います。そのようにして聞いた意見に基づいて、 企業会計研究会という10人ほどの委員会で議 論してもらい、意見書等を出していますが、そ れが発言のベースになってくるわけです。これ をうまく組織化していくという点が一番苦労し ているところで、幸い、非常に熱心な方々に参 加していただいております、質量ともに十分なイン プットをいただいていると思います。

会議に参加するからには発言しないと意味が ないのですが、発言するためには、何を言うか よく考えなくては いけません。考えるためには、 基本的にはどのように考えるのかという基本思 想・哲学が一番大事だと思っています。

特に今、世界が1つの会計基準を持つことは いいのか、悪いのか、これが一番の基本だと思 うのですが、その考えをしっかりと固め、その 考えに立脚して発言していくことが重要だと 思います。翻って日本全体を考えると、その辺 りのところが今まで少し弱かった、はっきりし ないまま来てしまったのが問題だと思っています。

それから、能力ということになりますと、表 現力を駆使する必要がありますし、何か表現す るときは、その前に共感力といいますか、相手 の言っていることに共感し、これを踏まえて自 分の意見を言うことが必要です。基本思想をベ ースにして、相手に共感して、その上で自分の意 見を言うと、相手に聞いてもらえる可能性は大 きいと思います。

そうはいても、コミュニケーションは難し い。何度もいろいろな会議で、純利益は大事だ

と発言してきましたが、長年知り合いだったアナリストと、先日、とことん飲んだときに、「日本の金融機関には多額の株式含み益があったのに、あつと言う間になくなってしまった」という話をしました。実際の額や規模に言及して「だから、自分はその他の包括利益累計額などは信じられない」と伝えたところ、「お前が言っていたことの意味が初めてわかった」と言っていました。そのときに、やはりコミュニケーションは難しいと思いました。会計に対する意見は、個別の経験に根差しているので、相手の経験を理解することが大切ですし、こちらの経験はかなり丁寧に説明してあげないと、なかなか理解してもらえないと思いました。

山田 財務諸表表示のJIG会議では、大量の資料が日本を出発する直前に届くケースが多く、資料の読込みと発言案の骨子の作成を飛行機やホテルの中でせざるをえないこともあることに苦労しているところです。ただし、最近では資料が3~5日前に届くように改善されつつあります。このように短期間で会議の準備をするためには、該当プロジェクトについて、IASBでの議論の動向をフォローし、問題点はどこにあるかを日ごろから考えておくことが重要です。

また、会議において専門的な議論をしている中で、発言するタイミングというのは非常に難しく、ネイティブの方々に比べると英語力のハンディがありますので、どのようにタイムリーに発言するかということもポイントになります。幸い、JIG会議では、席の前に名札を縦に立てておく指名してくれるという慣行がありますので、発言する必要がある論点については名札を立てて発言するようにしています。また、IASBで議事録を作る際に、多数派はどのような意見であったというまとめ方をされますので、他の人の意見と重複しても、必要な意見は発言するように心がけています。



世界作成者フォーラム委員/
パナソニック株式会社 理事

東京支社経理グループグループマネージャー

山田 浩史氏

事前準備についてですが、どのような問題点があるかということについては、まず日本の市場関係者の意見をできるだけ把握するように努めています。公開草案や論点整理に対するコメント、あるいはラウンド・テーブルやアウトリーチでの参加者の意見は参考になります。

また、ASBJのスタッフが、このプロジェクトのIASBのスタッフを兼任されていたこともあり、その方から情報を集めて、ASBJで事前に打合せをしてから会議に臨んだことは有益だったと思います。

当日の会議の中では、作成者同士は共通の意見となることも多いのですが、会議の中だけではなく、休み時間や食事のときにも議題について事前に少し会話をして同じ意見を共有できるという感触を得ておくことも有効です。また、IASBやFASBの理事、スタッフの方々と会議以外でも交流して、お互いに理解を深めていくことも大事だと思います。

また、IASBのメンバーに純利益やリサイクルリングの考え方を理解してもらうのはなかなか難しいところもありますが、第2回のJIG会

議でプレゼンテーションする機会をいただきました。パワーポイントを使って、ASBJの概念フレームワークの討議資料の考え方を援用しながら、純利益やリサイクルの考え方について説明すると、相手も完全には納得しないものの、そういう考え方もあるのかと理解してもらうことができました。このような機会を積極的に活用するのによいと思います。

石黒 最後になると言うことがなくなってしまいますね。(笑)

やはり言葉というのは大きいと思いますが、それ以上に議論慣れといいますか、ディスカッションなりディベートの流れの中で、いかに飛び込むタイミングを掴むかが重要だと思います。掴んでしまえばアテンションが来るので、ある程度の英語でも聞いてもらえるチャンスがあります。要は、相手が息を継ぐタイミングの見極めや、人より前に飛び込む方法など、そこが一番苦労しているところです。

発言の内容についてですが、日本企業は終身雇用的な部分が多くて、入社後、経理部署に配属され、そこで叩き上げられていくというようなところがありますので、私自身もそうなのですが、知識や経験面が偏ってしまっていることもあります。また、GPFでは会計基準のテクニカルな論点のみならず、経営的な視点からの意見や、将来のアジェンダ、IFRSはどこを目指すべきかなどの意見を求められ、私自身の知識や経験のみでは、不十分なことが多々あります。一方、海外では、監査法人や基準設定主体、一般企業の経験などを経て、例えば今は作成者の立場でGPFに出席しているような方々が多くいます。そういう意味では、知識や経験面からは全然太刀打ちできない中で、どのように発言していくかというところに苦労しています。

その対応としては、やはり意見収集が重要だと思っています。私の知識や経験だけではなく、



世界作成者フォーラム委員/
三井物産株式会社 経理部会計基準室室長代理

石黒 徹次郎氏

社内や同業他社さん、日本の他の企業の意見を収集したいと常日ごろ思っていますが、GPFでは2週間ぐらい前にアジェンダ・ペーパーが送られて来るので、それから意見収集しようとしても限度があります。その辺りにも苦労しています。

西川 ありがとうございます。ペーパーが送られてくるのが遅いというのは、私どもASBJにも耳の痛い話だなというふうにお聞きしました。(笑)

日本からの意見発信において必要な戦略

西川 それでは最後に、今後、日本の意見を国際的な基準開発によりよく反映するために必要な戦略や、国内市場関係者の対応のあり方などについてお聞きしたいと思います。中長期的な観点でも結構です。まずは、加藤さんから、お願いします。

加藤 皆様それぞれのお立場で、それぞれの国際会議に日本の代表として出席されて、ご意見を述べておられるわけですが、今までのお

話を伺っていると、ご自分だけの意見ではなくて、日本の市場関係者の意見をもよく聞いた上で、それらを会議の中でいかに意見発信していくべきかということについて、いろいろと腐心されているということが、ひしひしと伝わってきました。

そのときに、日本としての大きな方向性というものがあって、それに即した各市場関係者のご意見があるという構図になっていれば、皆様も意見発信しやすいと思うのです。その点、最近、会計基準設定プロセスにおいていかに「国益」を守るべきかということがよく言われるようになってきていると思われます。日本にとってその「国益」とは何かということ、いつも念頭に置きながら、個別プロジェクトについての市場関係者の意見を聞いた上でご自身のご意見を言われることにより、一貫した日本としての方向性の意見発信ができるような気がしています。

先ほど、金子さんから、関連するコメントとして、1つの国際的な会計基準を採用すべきかどうかということに関して、日本全体として、必ずしもコンセンサスが得られていないのではないか、というお話がありました。この点も含め、日本全体としてのあり方について、皆様がそれぞれのお立場でご意見を述べられるときに、何か念頭に置かれていることがあればお聞かせいただきたいと思います。また、日本からの意見発信を効果的なものにするためには、国内市場関係者はどのように対応していくべきか、ということに関して何かお考えがあれば、お伺いしたいと思います。

例えば、具体的な対応例としては、現在IASBが意見募集しているアジェンダ・コンサルテーション2011に対して、日本としての意見発信をしようという試みが各団体で行われております。そのようなことも含めて、日本全体としての意見発信の戦略のようなものについて

のご意見を伺いたいと思います。

西川 それでは、今度は順番を逆にいたしまして、石黒さんから順にお願いします。

石黒 日本の意見を反映させるための戦略というお話ですが、個人的には、会計基準を開発していく上での戦略ということにあまりピンときていません。戦略というと、何か根回しをして、パワーゲームの中で妥協の産物を作り上げていくような印象を受けてしまうためです。むしろ、IASBの理事やスタッフの方々は世界的に通用する高品質な会計基準を作ろうという強いモチベーションのもと活動されていますので、日本としても、IFRSのフレームワークに則って、何が正しいのかということをお考えた上で意見発信していく必要があると思います。

もちろん、国益を守らなければならないところはあります。それを守った上で、IFRSのフレームワークに則っても正しいと言える考え方を伝える。日本にもメリットがあるけれども、国際的に使われるIFRSにもメリットがあるという意見の発信をしないと、IASBとしても、日本のためだけの特別な対応は難しいと思います。そういうことを考えながら、同じ土俵に乗って、よりよい国際的な会計基準を作ろうという意見を発信していく必要があると思います。

また、これだけのメンバーが、いろいろな場にもいろいろな形で関与しているのですから、「どこかで誰かが言っているから、自分はもう言わなくてもいい」とは考えずに、「何度も繰り返し言う」ということは非常に重要だと思っています。

あと、IFRSをよくしようという意見を発信する際に、国としてIFRSを使っていこうという気持ちがあるということは、説得力という意味で非常に大事なことだと思っています。適用時期や対象範囲については、慎重に検討して最

最終的に決めていく必要があると思いますし、発信の仕方にもいろいろあるとは思いますが、やはり日本はIFRSに前向きに取り組んでいるということを示した上で、意見発信していくことが非常に重要だと考えています。

山田 会計基準は企業の事業活動や競争力を支える基本的なインフラであり、我が国の会計基準がIFRSとコンバージェンスを行っており、またIFRSの任意適用が認められている現状において、IFRSが市場関係者の納得できる質の高い会計基準になるように、意見発信を積極的に行っていくことは極めて重要です。会計基準で測定された結果というのは、経営者が業績の評価に使うものですので、会計基準は、経営者が納得できるものであって、それが投資家にとっても有用であるということがポイントになると思います。何でもかんでも情報を出してほしいという一部の投資家の方の中には、経営者が使っている情報でなくても構わないという考え方があるようですが、それは違うのではないかと思います。経営者の納得性のある会計基準を策定するということが基本にあるべきであると考えます。

現在、IASBはMoUを中心にかなり多くの会計基準を根本的に変えようとしています。短期間にこれだけ大きく変更する必要があるのか疑問を感じています。改訂すべき会計基準のプロジェクトを絞り込むことが必要であり、これから議論されるアジェンダ・コンサルテーション2011は非常に大事です。作成者の立場からは、IFRSは今後、会計基準の安定的なプラットフォームを確立する必要があると考えておまして、これまでに作ってきた会計基準のメンテナンスや、不足している事項への対応に重点を移すべきです。MoUのプロジェクトで行き詰まっているものについては、中止することも含めて検討すべきではないかと思います。また、現在、検討が進められているIFRSの課題とし

ては、特に実務的な適用可能性が確保できているかということと、コスト・ベネフィットの観点で開示の適正レベルが検討されているかということ、しっかりと確認していく必要があると思います。

私がJIG会議のメンバーとして関わってきた財務諸表表示のプロジェクトの改訂案については、直接法キャッシュ・フロー計算書の開示など市場関係者が納得していないところも多くありますが、課題になっている部分を再検討するよりは、純利益の概念の根幹に関わるその他の包括利益(OCI)やリサイクリングの考え方をしっかりと整理することを優先すべきではないかと思います。

次に、日本の意見を国際的な会計基準の開発に反映するためにはどうすればよいかということですが、意見発信をタイムリーに効果的に行うことは非常に大事だと思います。日本では公開草案や論点整理、あるいはアウトリーチなど正式に意見を求められた場合はしっかりと対応ができていますが、IASBは毎月、議論が動いておりますし、暫定合意も結構多いので、IASBから求められていなくても、意見があれば、タイミングよく積極的に伝えていくことが必要だと思います。例えば、退職後給付(IAS第19号の改訂)や負債(IAS第37号の改訂)について日本経団連、ビジネス・ヨーロッパ、アメリカのFEI(Financial Executive International)がIASBに共同レターを提出したことがあります。これらはコメントを求められているタイミングではありませんでしたが、IASBの議論に対して、効果的な働きかけをすることができたと考えています。そのためには、IASBの議論を可能な限りタイムリーに把握することが大切です。ASBJが、今年10月からIASB Updateの日本語訳の公表を始めましたが、よい試みだと思っています。このようにIASBの議論の内容を関係者に早く伝えて、関係者は

意見があれば、早目に ASBJ や篤地さんに伝えたり、直接、IASB にコメントしたりするなど、意見発信がうまく回っていく仕組みができればよいと思っています。

日本の意見を IASB に受け入れてもらうためには、日本の市場関係者が IFRS の策定に積極的に関わる姿勢を見せることが重要です。現在、企業会計審議会等で我が国の IFRS 対応のあり方が 2012 年に向けて検討されていますが、IFRS を所与として IFRS の影響を緩和するためにどうするかというような受身の対応でなく、IFRS を使い勝手のよいものにするために IASB にどのように働きかけていくかという積極的な姿勢が求められると思います。既に来年に設置されることが決まった IASB の東京オフィスを有効に活用することや、今後策定される IFRS の基準開発において日本の市場関係者の前向きな関わりを強化することが望まれます。

金子 石黒さんは、会計に戦略は馴染まないのではないかとおっしゃっていましたが、戦略の定義にも依るところがあって、基本的な方針や考え方と考えると、会計の戦略というのは十分にあり得ると思います。官民一体、あるいは作成者、利用者が一致できれば、結構いろいろなことで発言や役割発揮ができそうですが、どのような戦略を採るべきかとなると、基本的にはグローバル・ルールに従うということ以外あり得ないと思っています。

我々日本人の中には、まだジャパン・アズ・ナンバーワンだと思っている人が結構いるようですが、株価は 20 年前の 4 分の 1、名目 GDP は 20 年間全く成長していません。山田さんや湯浅さんの前で非常に申し上げにくいことですが、世界的に強い競争力を持っていた日本の電機業界や自動車業界も、新興国企業との激しい競争に晒される時代になっています。さらには、日本の人口減が今後急速に進むわけで、グロー

バル・ルールに従う以外、生き残る道はあり得ないと思います。

一部の作成者の方々が「日本企業の成長のためには日本の会計基準が必要」とおっしゃっていますが、ローカルな会計基準でしか達成できない成長は、所詮ローカルな成長に過ぎず、本当の意味での成長とは言えないと思います。グローバル・ルールに従って作られる世界の 1 つの会計基準を日本の国としてサポートしていくことが、基本的な戦略になりますが、それでは、その会計基準というものは、どういうものなのか、今 IASB で語られているものでいいのか、という点には議論もあるかもしれませんし、ここに日本として役割を發揮できる場面が、実は大いにあるのではないかと考えています。

というのは、とても雑駁な話ですが、会計の歴史を 3 語で表すとすれば、まず現金出納帳があって、発生主義の会計があって、それから究極的には全面時価主義だと言っている人がいて、今は発生主義と全面時価の途中で落とし所を探っていると言えると思います。7、8 年ぐらい前までは IASB に全面時価会計を支持すると思われる人がいましたが、現在ではかなり折衷的になっているわけですね。そこに日本の役割があるのではないかと思います。

我々利用者でいえば、アメリカのアナリストが一般的には最も先進的で、やはり時価会計志向が一番強い。ヨーロッパのアナリストは真ん中で、「そうは言っても純利益は必要」と言っていて、我々日本が、実は一番保守的のかもしれませんが、しかし、この 3 地域で比べているからそう感じるのであって、インド、中国、アフリカなども一緒に比べてみると、日本の今の考え方が、実は世界の中道なのではないか、先ほどから話題に上がっているリサイクルリングを支持する人が実は多いのではないかと、考えています。そういう意味で、基本的にはグローバル・

ルールに従うけれども、その中で、可能な限り自分たちの考えていることを、いろいろな場所で意見として述べていく。だから、国益という自分たちのエゴを通すように聞こえてしましますが、そうではなくて、「我々が発言することで世界の会計基準をあるべき方向に持っていく、貢献していく」という強い気持ちを持って、議論していけばいいと思います。

湯 浅 金子さんと「思い」はほとんど同じです。あるパネル・ディスカッションに参加した際に、FASBの研究員をされている川西さんがおっしゃっていたことをご紹介しますと、日本でグローバルな人材というと、日本の国益を国際的な会議で主張できる人のことだと言われることがあるかもしれないのですが、IASBからすれば、それは単にローカルな人材に過ぎないということになってしまいます。本当のグローバルな人材とは、出身国や出身母体の利益にとらわれない意見をしっかりとと言える人のことだとされているそうです。私もまさにそのとおりだと思います。

私がGPFに参加するにあたって、自分の発言は、例えば経団連などを代表したものでなければいけないのかと心配しておりましたが、そうではなく、あくまでも個人の資格として発言すればいいということになっています。私は確かに日本の作成者出身で、その経験に基づいた意見ですから、偏っているところがあると思います。ですが、自分の経験に基づく意見を主張する一方で、いろいろな国の人々の考え方を聞いて理解して、各々の意見や考え方の長所を選択することで、よりよい考え方を一緒に作っていくというスタンスが大事です。そうして作っていったものが、改めて自分の意見になっていくものではないかとも思います。

そういう意見形成をしていく前提として、国際的に統一された1つの高品質な会計基準ということがIASBの理念として掲げられており、

これをサポートするということが共通認識になっている必要があると思います。ところが、IASBをサポートする、世界共通の会計基準を作っていくという方向性自体が揺らいでいないか、今、日本として改めて確認する必要があると思います。

IFRS ICのメンバーをお引き受けするときに、私のような者でいいのか、と非常に迷いました。いろいろな方から激励のお言葉をいただいて、お引き受けすることにしたのですが、その根底には日本としてIASBをサポートし、国を挙げて1つの会計基準を作っていくという強い思い、方向性が前提としてあることは疑いの余地がありませんでした。実際に今、私は、ASBJの皆様をはじめ、多くの情熱的な方々に絶大なご支援をいただいています。現在、IFRSを巡ってはいろいろな議論が行われているところですが、IASBをサポートしていくという前提は決して変わっていないと思っています。日本の国益をしたたかに主張していくという側面もあるとは思いますが、国際的なルール作りに継続的に関与していくためには、日本の国益だけではなく「国際益」、インターナショナルな利益に対して、どれだけ貢献できるかという共通認識が必須だと思います。そのためには、現在、行われている議論の中に誤解に基づくものもあるようですから、IASBが考えていることを、日本の中で可能な限り伝えていくことも、私どもの責務であると思います。

鷺 地 まずは、先ほどの「国際的な舞台上求められる能力」で申し上げた情報収集という観点からですが、情報を得ているだけでは全く意味がないので、いかにして意見を発信するかということも大事です。私もIFRS ICに5年間携わってきて思うのですが、自分としては一生懸命プレゼンテーションしたつもりでも、結局、全然伝わっていなかったのではないかと思うことが何度もありました。自分なりに分析してみ

ると、先ほど申し上げましたように、背景が必ずしも理解できていなかったことがわかりました。理解するのに1時間や2時間どころではなくて、場合によっては何年もかかるかもしれないような違った背景を持って議論に参加している可能性もあるわけで、藪から棒に発言しても、まず理解してもらえないことがありました。ですから、日ごろからの意見発信が大事だと思います。

日本には「根回し」という言葉もありますが、「日本ではこういう意見もある」という話を、会議の参加者やスタッフなどと事前に意見交換しておくことによって、自分の本当に伝えたいことを理解してもらえるようにしておかないと、会議の場で突然発言しても、理解してもらえないという気がします。

ただ、それよりも大事なのは、日本の国から、レター又はアウトリーチといった形で、日ごろから、ある程度ボリュームのある情報を継続的に流し込まないと、なかなか理解してもらえないと思います。先ほど石黒さんもおっしゃっていましたが、同じことでもいいので、日本で議論していることを、日本内部の議論にとどめずに、レターをどんどん送付する、あるいはIASBとASBJのスタッフ同士が懇意になって電話で相談する。そういう信頼関係を築いていくことが非常に大事で、理事として参加している私も、仕事が非常にやりやすくなると思っていますので、ぜひ皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

続いて、別の視点から申し上げたいと思いますが、会計基準というのは、基本的には正解のない世界で、物理学や数学のような絶対的な正解がない中で、合意点を見出すことが会計だと思っています。ですから、会計の最大の目的はコンセンサスを得ることで、コンセンサスを得るためには、お互いに理解して、お互いのために一番いいところで合意する、これが基本的な

会計ではないかと思っています。

昔のIASBには「こういう会計基準を作らなければならない」ということで動いていたところが、もしかしたらあったのかもしれませんが、少なくとも今のIASBが目指しているところは、「世界中が本当に合意できるものは何か」ということを一生懸命探して、それに向かって進んでいるわけです。それ故に、会議に時間がかかっているわけで、例えば、保険会計は10年以上かかっている（少しかかり過ぎという気もしますが）、やはりいろいろな関係者の意見をよく聞いた上で、全員が納得できるようなプリンシプルを見つけるという作業を延々とやっているわけです。合意できるプリンシプルを見つけるために、どのように貢献できるのか、ということを考えるのが一番重要なことかと思えます。

それと、国益という話と、国際的な基準作りという話ですが、IASBは、国際的に合意できるものをまとめなければいけない立場なわけです。まとめなければいけないという相手（IASB）の立場になって物事を考えることができるか、つまり、自分も一緒にまとめようということが、IASBにとって信頼できるパートナーかどうかということが、非常に大事だと思っています。そのためには、日本語でいえば「尊敬」という言葉になりますが、「リスペクト」が大事で、上下関係ということではなくて、イコールのパートナーとしてお互いを尊重するという意味での「リスペクト」の関係が築けるかどうかポイントになると思います。

当然、日本にもいろいろな国益や立場があるわけで、それは意見していく必要はあります。ただ、意見発信するときの態度ですが、対案を示さないなど、何ら責任をとらない形での意見発信は、一緒に1つの物事をなし遂げようとするパートナーとしての発言にはならないので、当然、リスペクトも得られず、相手にされなく

なってしまいます。一度相手にされなくなると、信頼を回復するには相当時間がかかります。

今の日本の会計基準設定主体は、単にIASBだけではなくて、国際的にも相当、リスペクトを得られるところまで来ていると思っています。やはり何年間かの積み重ねがあって、ここまで来ているわけですので、ASBJには今の関係をできるだけ崩さないような形で続けていただければと思っています。

先ほど金子さんから国力の話がございました。確かに国力という意味でいえば、日本の存在感は小さくなっているでしょうし、将来的にも人口等を勘案すれば、なかなか難しいものがあると思います。ただ、単純に国力ということだけでいえば、例えば、ニュージーランドは非常に小さい国ですが、IASBのシニアスタッフのうち2名はニュージーランド出身ですし、IFRS ICにもニュージーランド出身のメンバーがいて、非常に重要な形で貢献されています。IFRSもIASBも、国力や国の立場を反映して、国と国とがぶつかり合う場ではありません。高品質で、多くの人から広く受け入れられる会計基準を作るための戦略と一緒に考えられる人、国、組織が非常に大事ではないかと思いますので、今後も日本がそういう立場で貢献していけることを願っています。

加藤 今までの皆様のお話をお伺いしていて、非常に心強く感じたのは、「国益」とは日本の立場からだけでなく、グローバルな視点から考えていかなければならないということでした。湯浅さんが、「国際益」という言葉が使われたことに、このような皆様のお考えが如実に現れていると思います。

皆様からも言及があったアジェンダ・コンサルテーション2011は、今後3年間あるいはもっと長い期間のIASBによる基準開発の方向性を決めるものですから、非常に重要であり、それ



ASBJ 副委員長 加藤 厚氏

に対する日本からの意見発信をする絶好の機会ですから、各団体からもぜひコメントを提出していただくことを期待しております。その場合には、日本独自の意見もあれば、国際的にも共感してもらえるものなど、さまざまな意見が発信されるものと予想しております。それらの中でも、多分、純利益概念とその他の包括利益からのリサイクリングの維持に関する意見が最優先項目として挙げられることと思われます。これは、アメリカを含めた多くの国々とも共有できるコメントになると思われます。ただ、大切なことは、単にコメントを出すだけでなく、コメント締切後のアジェンダ決定プロセスにおいても、日本からの意見が通るように、私どもASBJと今日ご出席の皆様が一緒になって努力していくことだと思います。IASBの最新の作業計画によると、アジェンダが最終的に決定されるのは、2012年中に延びました。したがって、コメント締切後においても、今日お集まりの皆様がご意見を発信できる機会が設けられるものと思われますので、それぞれの場においてぜひ積極的にご発言をしていただきたいと思います。

そして、世界中から集まったコメントを基に

して、IASBは今後3年間のプロジェクトを決めて実行していくことになります。その場合に、各国とも自国の意見がすべて反映されないかもしれませんが、いったん決まった以上、いずれの国もそれを受け入れ、積極的にIFRS開発・改善プロジェクトに参加していくのが相互信頼に基づいた国際ルールのあり方だと思います。

私どもASBJは、今後も皆様と一緒に、日本の意見が最大限反映されるように、IFRSの開発・改善プロジェクトに貢献していきたいと思っております。

おわりに

西川 実は、今までの本誌の座談会というのは、特定のテーマを取り上げて、公開草案が出たとか、論点整理が出たとかいう機会に、専門委員会等の議論に参加された方を中心に集まっていたいて座談会を開いていました。そういう意味では、これまで専門的な領域での意見交換ばかり扱ってきたわけで、今回のような、どのように国際舞台で意見を主張していくか、というテーマは初めてだったかもしれません。そういうテーマでしたので、皆さんに自由に語っていただき、司会は楽をさせてもらい、ありがとうございました。(笑)

鶯地さんのおっしゃるように、会計の世界には正解がないというか、正解が1つとは限らないということが多いですね。前提の立て方や理屈の立て方によって結論も変わってくるだけに、一度出した結論を覆すような議論をしていくのは、なかなか難しいと思っています。日本の会計基準が出してきた結論は、アメリカの考えを受け入れた結果、アメリカとIFRSの違いに苦しんでいるところが1つ、公正価値を適用する範囲、ここには、OCIか純利益かも含まれますが、この範囲について考え方を合わせる



ASBJ 委員長 西川 郁生氏

ところでも難しいところがある。ASBJとしては、今後、日本から強力に意見発信をしていく中心的立場になるということがいよいよ明確になるのですが、そこをきちんとするには、日本の関係者の意見を集約し、論理の整理をして意見発信をするということではなければならないと思っています。そのためには、まずは、関係者の意見をきちんと聞くところから始まると考えています。最近のIASBとの共同会議でもASBJの意見は、貴重なものと受け止められています。この受止めが、IASBの一部にとどまらず、広がっていくよう、内部での議論も充実させ、内外の基準開発に貢献していきたいと思っています。

また、中長期的には、財務会計基準機構(FASB)／ASBJの活動として、新井副委員長を中心に人材開発プロジェクトを進めておりまして、将来的にIASBの理事、あるいはIFRS ICのメンバー、基準開発の影の実力者であるIASBスタッフ、特にプロジェクト・マネージャーなどを担える人材を育てていきたい、という議論をしているところでございます。監査人に偏重せず、作成者、利用者からも人材を出していただいて、できる限りの教育を

する。開講は、2012年初めになると思いますが、本日お越しの皆様にも講師をお願いする機会があるかもしれません。その節はよろしくお願いします。

それでは改めまして、本日は、皆様、貴重なご意見をいただき、大変ありがとうございました。

(注) IASBの関連記事として、本誌10頁に「IASB共同会議プレスリリースの公表」、164頁に「IASBの動向(2011年8月~2011年10月)」を掲載しています。また、湯浅一生IFRS解釈指針委員会委員には、本誌174頁に「IFRS解釈指針委員会の活動状況」を連載いただいていますので、あわせてご覧ください。